

「私と湿地と生きもののかかわりー「風に吹かれて」 人生履歴書

発表者： 安藤 元一

(2018年5月12日<ワイズユース>ワークショップの講演をまとめたものです)

若い RCJ メンバーの方に私と湿地との関わりについて、履歴書的に話してみます。

子どものころ、私はディープ大阪といえる天王寺界隈で育ちました。アマガエルがいたら大騒ぎするような、自然とは縁のない環境でした。小学校5年の時に「野生のエルザ」という本が新聞のベストセラー欄トップに何週も掲載されていたので、父に頼んで買ってもらいました。ケニアでライオンの孤児を育てる話で、とても感激しました。シートンの「動物記」も同様に何度も読みました。ただそれだけだったのですが、こういう本を読んでいなければで大学で野生動物の講義を聴いてもそれほど感激しなかったと思います。高校では生物クラブに入り、鳥好きや虫好き先輩の知識量に圧倒されていました。しかし動物の世界に入り込むことはなく、中高生時代は普通に鉄道少年をしていました。



子どもの頃に影響を受けた本

学生時代

上京して1969年にICU大学に入学しましたが、大学紛争華やかなりし頃で、学内にバリケードが巡らされて1年間授業がありませんでした。寮は全共闘の拠点でしたが、聖書研究会に参加、社会科学系の学生と酒盛り、先生のお宅に出入り、アルバイトの電話交換で英語の鍛錬、女子寮にストームなどいろんな経験がありました。紛争が一段落したとはいえ、学内にはギスギス感が残っており、議論よりは体を動かすコミュニケーションをということで、在学中はワークキャンプによくでかけました。開拓牧場で荷台に学生を満載した無車検の車を無免許で運転するなど、今では考えられないほどいい加減なことをしていました。その頃は授業の出席確認もなく、授業にはあまり出ませんでした。大学生生活はひとりひとりが異なる経験をするためのモラトリアム期間として活用することでよいのだと思います。今の世の中はルールだらけで、若い方はこれが当たり前とっておられるはずなので、最も手っ取り早く息苦しさを理解する方法

として、海外に出て別の世界を経験することをおすすめします。



学部生時代

理系の学科でしたが、すぐに物理数学などがわからなくなりました。これを積分したら特異点がゼロになってといった講義をされてもさっぱり実感が湧かないのです。困ったなと思っていた頃、日高敏隆先生というすごく話が上手な動物行動学者がいて、そのセミナーが面白いからと友人に誘われて出てみたら本当に面白いのです。誰にでもわかる話をされる。「これだ！生物をやろう！」となりました。コンラート・ローレンツ（注：オーストリアの動物行動学者。刷り込みの研究者で、近代動物行動学を確立した人物のひとり）が1973年にノーベル賞を受賞するなど、そのころ動物行動学が流行だったのです。自分は時代の流行からは関係ない場所にいるつもりでも、やはり世の中の影響を受けていたわけです。

ICUはリベラルアーツを標榜していたので専攻選択が自由で、これには助けられました。物理から生物に移ることはできませんということであれば、物理が分からなくなると、低空飛行で卒業するか、卒業できなかったかだったと思います。学生全体をみても、大学紛争の中で社会問題に触れる機会が多くなって、理系学科から半分近い学生が人文社会系学科へ転科してゆきました。大学はそういう選択ができる材料を与えてくれる自由な場所として貴重な人生のステージだと思います。

私は今、獣医学科で野生動物学という科目を非常勤で教えていますが、勉強方法がまったく異なる世界です。全員が獣医師を目指していますから、まず獣医師国家試験に合格せねばなりませんので、学生の関心はそれに集中します。授業での質問も、今日の講義のどこが試験に出ますかといった内容になります。獣医師になればウシから小鳥までどんな動物のどんな診療科目にも対応できることが建前ですから、6年間で何とか疾病学だとかをひたすら覚えなさいといけません。課外活動などに打ち込む余裕はないでしょう。

大学教育には2種類あって、一つはリベラルアーツに

代表される、どんな場所に置かれても問題を解決してゆける人間力の養成です。もう一つは医学部、獣医学部のように高等な専門学校として特定職業のための専門力の養成です。この違いは大学受験生や保護者にあまり理解されていません。野生動物学を勉強しても就職先がないでしょうと保護者の方によく尋ねられますが、それは大学教育を後者の視点から見ているためです。野生動物学研究室にはいる学生にとって、そこは「野生動物学を」ではなく「野生動物学を通じて」学ぶ場所だからです。

学生時代の時代背景

小～大学生を過ごした 1950-70 年代は公害問題が深刻化していた時期です。小学校の頃、冬になると大阪の街は 100m 先が見えないスモッグで覆われるのが普通でした。今の北京より酷かったと思います。上京して大学生になったのは 1969 年ですが、その頃も東京の西部、三鷹から富士山が望めるのは工場が休む正月三が日だけという状態でした。正月には富士山の写真を撮るためにカメラに望遠レンズを付けて準備していました。

誰の目にもわかる環境汚染が世界中に広がる中、環境問題に対する世界の関心も一気に高まりました。ローマクラブが「成長の限界」を 1972 年に発表したのをはじめ、「人類に未来はあるか」といった警告本がたくさん出版されていました。環境問題への枠組み作りもはじまりました。海外では 1972 年にストックホルムで国連人間環境会議が開かれ、1973 年の国連環境計画 (UNEP) 発足につながりました。ラムサール条約や野生生物の国際取引を規制するワシントン条約 (CITES) もこのころに採択されています。国内では 1971 年に環境庁が発足しました。自然を破壊する開発行為には反対し、水質汚濁を規制して下水道を整備する、大気汚染対策として車の排ガスを規制するなど、急いで解決せねばならないことが誰から見てもはっきりしていました。

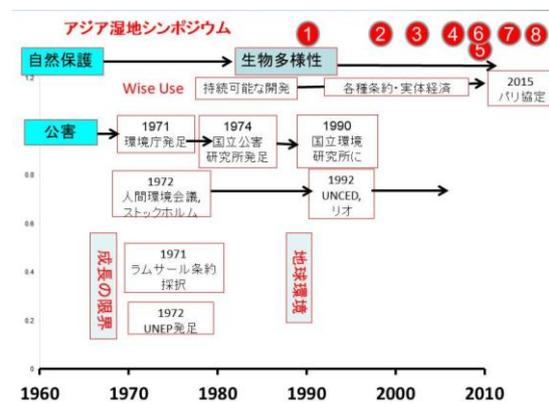
ところが現在、いろんな対策が進んできました。大規模環境変化には環境影響評価が義務づけられるなど、各種の法令に環境対策が盛り込まれています。経済停滞の影響もありますが、埋め立てで干潟がなくなるといった事案も減少しました。大気汚染は改善されて東京から富士山は普通に眺められます。河川や湖沼の水質も下水道の整備などによって回復傾向にあります。環境に関する地域の取り組みで最も多いのは昔も今も美化活動ですが、河川のゴミ回収をしてみると、ゴミの量は昔より確実に減っています。市街地の清潔さに関しては、いつのまにか訪日外国人観光客にとって最も印象に残る項目にまできています。

すなわち、1970 年代のように「今、これをしなければ」という合意形成が難しくなっていますし、温暖化による影響など少々の努力では成果が見えにくくなっています。CITES における象牙取引の問題は、戦争などの政治社会問題のために採択から半世紀近く経っても大きな進展がありません。国内の諸問題も大部分は高齢化などの社会問題と不可分です。一つの問題に取り組むにしても開発



ロンドンのスモッグ(Wikipedia)

と保護との対立といった簡単な図式ではなく、ステークホルダーが入り交じって調整が難しくなっています。その中で NGO がどのような活動をしてゆけばよいのか、それを託される若い世代にとっては昔より難しい時代になっていると思います。



過去半世紀の環境トレンド

研究の面白さを知る

車を持っていない学生が電車で通えるフィールドとして、卒論は今泉吉晴先生の指導で高尾山のムササビ観察でした。その頃、ムササビの生態はおろか、高尾山に生息することさえほとんど知られていませんでしたが、薬王院境内で大木をライトで照らすと、ヒューッと滑空するのが見えたのです。しかも観察に出かけるたびに、ムササビはリスの仲間なのに葉っぱ食べているとか、こんな季節に樹洞から子供が顔だしたとか、毎夜、何かの発見がありましたので、ワクワクして通いつめました。自然があるがままに記録してゆく自然史的な研究ができたのです。そのときは気づかなかったのですが、ムササビは人をそれほど恐れませんが観察入門用に最適の動物でした。今もムササビをテーマにする卒論学生はいるのですが、懐中電灯を持って山に行くだけで世界の誰も知らないことが簡単にわかる時代は残念ながら終わったようです。観察でなく研究となると、目的を明確にして仮説を立て、それを検証するという手法を用いねばなりません。今の若い人たちに、私の感じた「私が世界で初めて見るのだ」という感動をどうやって経験してもらえばいいのか、私もわかりません。



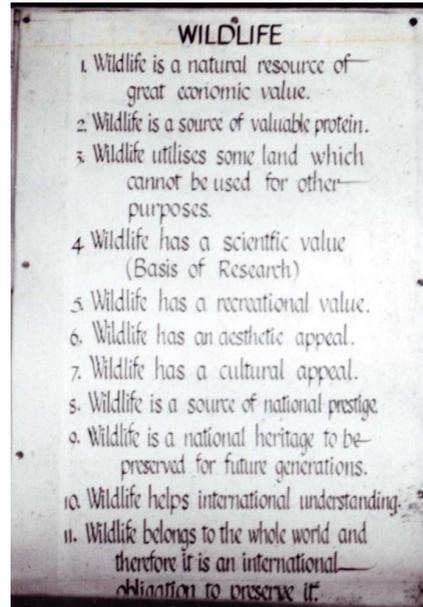
フラッシュバルブによる初のムササビ撮影

アフリカ

卒業後は小原秀雄先生の紹介で羽仁進さんという動物好きの監督のテレビ映画撮影チームに入って東アフリカに行きました(今でいうADです)。大学で学んだ動物の知識が少しは役立つかと思っていたのですが、なんの役にも立ちませんでした。大学の勉強はそういうものではないことを思い知りました。その頃、ナイロビには小倉寛太郎さんという山崎豊子の「沈まぬ太陽」のモデルになった方がおられて、サファリハンティングに同行させてもらったり、今ではできないような経験をしました。昨日と同じ日は二度と来ないような生活でしたので楽しかったのですが、車の運転手をしたり、保険会社と交渉したり、やりたいのはそんな仕事じゃないのだという思いがつのり、早く日本に帰って高尾山に戻りたいという気持ちでおりました。

その仕事の合間、ウガンダのエンテベにある動物園に寄った折りに、「野生動物(Wildlife)とは」という小さな手書きポスターを見つけました。これを見て「アレっ?」と思いました。箇条書きされた野生動物の価値の一番目が「野生動物には大きな経済価値を持つ天然資源である(Wildlife is a natural resource of great economic value)」だったのです。もっと驚いたのは、二番目に「野生動物は貴重なタンパク質資源である(Wildlife is a source of valuable protein)」と記されていたことです。ブッシュミートとしての価値ですが、日本ではそんな事実自体が知られていませんでした。最近になって野生動物のジビエ利用が注目を集めていますが、そのころ日本で野生動物というと希少種を守ること一辺倒で、資源管理という発想はありませんでしたので、これは本当に目からウロコでした。このポスターの後半にはラムサール条約をはじめとする国際協力の精神も盛り込まれています。

当時の日本で「野生動物の価値は?」と聞いたとき、こういう項目は私たちからは出てこなかったと思います。今の学生にアンケート調査しても同様です。「野生動物」を「湿地」に置き換えても同じことが言えると思います。仕事の対象をぼんやりとしたイメージでとらえているだけでは、価値観の異なる国々との共通理解はむずかしいと思います。



エンテベ動物園で見つけたポスター

大学院

帰国後は先生の翻訳手伝いなどで何とか暮らしていました。しかし、枚数単価の翻訳で暮らしていれば、収入を増やそうと思ったら働く時間を増やすしかありません。今では翻訳自体が機械翻訳などで職業として成立困難になっています。これではまずかろうということで28歳で九大大学院に入りました。遅すぎますが、まあ何とかなるだろうと先のことは考えていませんでした。院には35歳までいましたが、25年働いて年金受給資格を得るにはぎりぎりだし、学割で切符買ったりするのは気が引けるという歳でした。大学院ではゼミで発表したりムササビ研究の論文を書いたりしていましたが、何が身についたかあまり記憶にないのです。大学院の8年間と学部4年間、どっちが濃かったかという点、若くて可塑性に富んでいた学部4年間の方が1桁以上は影響が大きかったと思います。大学院だと同僚もほとんど同分野ですから、社会的な視野は広がらないのです。

韓国のカワウソ

大学院在学中の1982年に、交換教員として韓国の大学で1年間勤務する機会がありました。その頃の日本ではニホンカワウソが絶滅寸前だったのですが、実習準備で韓国の海岸岩場にでかけたところ、まったく偶然にカワウソの糞を見つけました。大感激しました。日本はもうダメだが、せめて韓国にいるカワウソは助けられないだろうか一念発起しまして、これまで韓国のカワウソ調査を続けてきたわけです。今では韓国のカワウソはほぼ全土に回復して、最後に残った非生息地がソウルのハンガン(漢江)でも回復プロジェクトが始まり、糞も見つかっています。韓国からのカワウソ研究論文も増え、韓国カワウソ研究センターも設立されました。日本でもトキやコウノトリでは野生復帰が順調に進んでいます。1990年代には夢と思われていたことが、たゆまぬ努力をして20年30年たったら実現できている。本当に嬉しい

です、夢を捨ててはいけなかったと思います。

韓国のカワウソ回復は日本にも影響しています。対馬で2017年にカワウソが自動撮影されたのです。どうも3頭くらいはいてDNAは韓国のカワウソと同じようですが、それならば泳いできたのか、漂着したのか、船倉などに隠れて密航してきたのか、調査をしたいのですが、まだ実現できないでおります。韓国から渡来したことを前提として確かなことは、韓国のカワウソが増えたからこそ可能になったということです。ラムサール条約に示されているように渡り鳥に国際協力が必要なのは明らかですが、往来は無理と思われていた動物でも保全の成功が隣国に影響するということは仕事人生の終盤に衝撃でした。同時にこれまで韓国で種をまいてきたことが、少しは役だったかとうれしく思いました。



韓国カワウソ研究センター

ILEC

学位取得後も就職先がないので調査会社でアルバイトをしていたとき、知り合いの先生から「滋賀県から明日締め切りの職員募集がきているけど」という電話がありました。徹夜で履歴書を書いて提出しました。今だったらネット公募なのでしょうが、当時の公募は限られた関係者に募集要項を送るだけというのが一般的でした。県職員に学位を持って英語のできる人がいないということで採用され、湖沼環境を扱う国際機関を作る要員になりました。これは国際湖沼環境委員会(ILEC)という形で実現されました。

職は得ましたが、これまでやってきたことはムササビやカワウソなどの野生動物です。水のことはまったくの素人ですから、機会があったら脱出したいと悩んでいました。仕事では会議や研修をやるが多かったのですが、5年くらい経った時に、自分が人から受け取っている情報量より自分から出している方が多いのではないかと感じる機会がありました。自分もこの分野でやってゆけるのではないかと思います。

もう一つは社会の変化です。1980年代前半における湖沼環境問題はCODや透明度といった物理化学的なパラメーターを基本とする水質問題でした。しかし1980年代後半になると地球環境や生物多様性といった課題が話題になり、湖岸生態系保全といったトピックが注目され始めました。滋賀県は優秀な物理化学系の職員を抱えていましたが、生態系の話になると皆さん戸惑っておられるようなのです。ひょっとすると自分の専門を生かせる時代が来たのではないかと感じました。これも世の中の

動きにたまたま乗っているということですね。

ILEC でよかったのは社会科学系の方と日常的に接点があったこと、もう一つは県職員として色々な立場の視点が必要ということを知ったことです。例えば、湖での砂利採集を禁止したら、それに従事している人の収入はどうなるのだという風に、いろんな立場の人への影響を考えないといけない。ただ自然保護を進めれば良いというものではないというのが、この間に学んだ大きな事でした。

ラムサールセンターとのかかわりができたのもこの時です。中村、武者さん達が琵琶湖に来られて、1993年の釧路締約国会議の前のイベントとして湿地に関する国際シンポを開きたいが、金もノウハウもないから協力してほしいと要請されました。ILECには会議開催のノウハウはありましたので、それなりに力を入れて協力しました。



第1回AWSを琵琶湖研究所で開催(1992)

調査会社

ILECは滋賀県の外郭団体でしたので、人事は県の都合で行われます。自分のやりたい仕事内容や組織体制ではなくなってきたと感じ、誘われて調査会社に移りました。若い人の働く後方を支える仕事をしようと総務に入ったのですが、自分に組織マネジメント能力が無いこと、すなわち人々の間を渡り歩いて調整してゆくような能力がないことはすぐにわかりました。そんなタイミングに、ILEC時代の知人から「JICAのラトビア湿地調査に応札を考えているが、湿地の専門家として調査団の補強要員として参加しないか」と誘われました。RCJがお世話になっているインテムの土居さんとは、調査団の中でお知り合いになりました。湿地と会社業務が初めてつながりました。

会社でまず学んだことは、仕事は自ら獲得しないといけないし、業務を選び好みできないことです。行政では財源は予算配分されてきますから、どう使うかだけが仕事です。研究の世界では科研費などにやりたい研究を申請して財源を確保しますが、獲得できなくても即座に食うに困ることはありません。NGOでも企画を立案して助成を申請するのが仕事の基本ですが、近年は行政事業の下請け役という面が目立ちます。どう舵取りすればいいのか悩ましいところです。納期の大切さも徹夜続きの仕事で身をもって体験しました。学生ならばレポート提出が期限に間に合わなくても、研究者が論文をあまり書かなくても自己責任で済みます。しかし会社の仕事は次

に社会のどこかが行かう仕事につながります。こうしたことを教える科目はないので、授業で話したところ、多くの学生が「ひどいレポートでも期限内に提出すればよいのだ」と誤解してしまったのには参りました。

大学教員

東京農業大学に50歳を過ぎて移りました。それほど親しくなかった野生動物学の先生から突然電話があり、「募集があるのだが、来ない？」みたいなことでした。大学の職を探していたわけではないですし、もう自分の仕事は水環境で、野生動物を扱うことは無いと思っていましたら青天の霹靂でした。呼んでくれた先生がたまたまニホンカワウソの研究をされていて、それで声をかけていただいたのですが、世の中は縁でできているなと思いました。

野生動物の世界に戻ってすぐにわかったのは、15年間



ラトビアの湿地復元調査

の行政や企業の経験は役に立たないことでした。そんな経験を加味してもらえない仕組みはなく、評価は研究業績がすべてなのです。幸か不幸か、これまでの経験で野生動物を他の研究者が思いつかないような多様な視点で見ることができましたので、様々な研究アイデアをアンテナ研究として卒論学生にやってもらいました。私学は学生数が多いので、卒論指導を担当する学生が年15人くらい、在職中に250本くらい卒論指導しました。湿地研究をはじめ、やってみたいと書き留めていた研究テーマはだいたい手を付けたかと自己満足しています。しかしいざ本格研究につなげようと思っても多すぎて収集がつかず、卒論の大部分は提出されただけで、そのあと使われていません。学問は進歩しますので、最新の知見も10年経ったら世間の常識になります。学問的な知見は生もの、腐るものなので、その折々にちゃんと発表してゆかねばならないというのが反省点です。

上の段で「幸か不幸か」と書きましたが、不幸の方は関心を広げすぎて専門性を高められなかったことです。現在の研究はどの分野も高度化していますから、まともな研究成果をあげるためには感覚的に5年くらいのリードタイムが必要です。そうしないと外部資金も獲得できません。継続的な取り組みが成果につながることはRCJ自身も示しています。

大学で予想外だったのは、学外に出る時間が自由にならないことです。出席管理のうるさい現在では、学期中に大人数講義を休講して補講で埋め合わせる操作はまず不可能ですし、休暇期間にも実習や採点があります。農

大の場合は海外出張に2ヶ月前に申請が必要でしたし、認められる期間もせいぜい10日間です。韓国カワウソ研究も多くの院生、学部生に扱ってもらいましたが、フィールドに同行することができないのです。私が学部生時代に先生の長期野外調査に帯同して多くを学んだような伝承経験を、今の学生はできないのです。在職期間後半には苦手な管理職的な用務も多くなり、自由度はますます下がりました。

ラムサール条約の時代変化

ラムサール条約が1971年に採択されてから現在までは、これまで述べてきた時代とほぼ重なりますので、時代背景として復習しておきたいと思います。この条約は当初、渡りをする水鳥を保護するためには国際協力が必要ということで採択された、目的のはっきりした小さな条約でした。締約国会議の第1回会議は1980年に行われていますが、1987年の第3回のリジャイナ会議までは条約の体制づくりが中心議題でした。会議の実質的な成果は危機にある湿地に関するモントルーレコードが定められた1990年の第4回モントルー会議くらいからです。

ラムサール条約の特徴は、賢明な利用（ワイズ・ユース）という発想が採択時から盛り込まれていることです。ほぼ同時期に採択されたワシントン条約は、保護のために国際取引を制限しろというだけで、ワイズユースの発想は含まれていません。ワイズユースが目立つようになったのは、第5回釧路会議（1993年）の頃からです。この前年である1992年には地球環境を扱った「国連環境と開発会議」（UNCED）がリオで開かれ、持続可能な開発（sustainable development）がキーワードになりました。ワイズユースは持続可能な開発とほぼ同義だと思いますので、ラムサール条約も世界全体の動きと同期していると考えてよいでしょう。

ブリスベンで開かれた第6回会議（1996年）では登録湿地基準が拡大されて、水鳥だけでなく地形、魚類、サンゴ礁など様々な基準で湿地を登録できるようになりました。条約のロゴも水鳥から水をシンボライズしたものに変わりました。以降、人と湿地とのかかわりが重視されるようになり、第7回サンホセ会議（1999年）では啓発活動（CEPA）が、第8回バレンシア会議（2002年）や第9回カンバラ会議（2005年）では農業、集水域管理、水と文化とのかかわりが重視されました。第10回昌原会議（2008年）では鳥インフルエンザなどの影響か健康がテーマになりました。第11回ブカレスト会議（2012年）ではツーリズムや水田害虫管理、第12回ウルグアイ会議（2012年）では湿地自治体認証や防災などの決議がありました。しかし近年の会議では財政問題など行政的な色が強くなり、条約を大きく方向付ける決議が見当たらなくなっている印象です。日本の環境省が扱っている法律にしても、この10年間ほどは大きな新法は制定されていません。これは停滞を意味するのか、それとも円熟期に入って諸課題が各国で制度化されてきたためなのかよくわかりません。



ラムサール条約締約国会議に見られるトレンド

NGO の役割

中村さんたちは第 4 回会議の頃から欠かさず締約国会議に参加しておられます。国代表の出席者は毎回変わりますし、条約事務局内にも長く勤めている人はわずかなので、RCJ はラムサール条約とともに歩んできた NGO といえるでしょう。

RCJ が 1990 年に設立されて最初の大仕事は、1992 年に大津・釧路で開催した第 1 回アジア湿地シンポジウム (AWS) でした。このシンポではラムサール条約がどんなものであるのか国内で紹介するのに精一杯で、ワイズユースはいかにあるべきといった課題には踏み込めていませんでした。RCJ 設立時の「基本認識」の書きぶりにもその名残があります。その後、AWS は RCJ が核になってアジア各地で開かれる会議となりました。第 9 回カンパラ会議では RCJ が中心になって取り組んできたアジア湿地シンポジウムの役割が評価され、地域フォーラムの重要性に関する決議が採択されています。

シンポジウムを開催する目的は、やはり情報交換です。科学研究の成果は各種学会で発表できますが、行政、企業、NGO がグッド・プラクティス経験を国際的に交換する機会はそれほどありません。地方行政の場合は地域外に自分たちの成果を PR するという発想そのものがないので、NGO が代理で事例を発掘紹介してもよいでしょう。「あっ、その手があったか」、「これをヒントにすれば面白いことができるのではないか」という役割を果たしていけるでしょう。国の場合は通達という上意下達方式で意思を地方に伝達しますが、権威を使わないでも、良いことをやればみんなが勝手に真似て広がってゆくという発想もあります。隣百姓方式と呼びましょうか。

よい事例は分野を超えても広がってゆきます。例えば ILEC にいるときに「あなたのやっているのは湖でしょ、今は地球環境の時代だよ」と言われたことがあります。その指摘はあたっていませんでした。対象は湖だけど、そこでいい仕事をしたら、その方法論は多くの場合、都市や森林保全にも使えます。例えば ILEC という組織がうまくゆけば、他の自治体が似たような組織をあっという間に作りました。

国際的な活動をする NGO は、小さくてもきらりと光る仕事をせねばなりません。そのためには目的の明確化が必要です。ILEC で「世界湖沼データブック」を作

ったことがあります。こういうデータブックがあれば、いろいろな人がいろんなことに使ってくれるのではないかという思惑でした。結局、手間ばかりかかって誰も使いませんでした。目的がないものは使いようがないのです。これに対し、「ガンの渡りルートを保護するための湿地目録」の方が使用目的は明確ですし、派生して別の目的にも使えます。

若い世代を育てることも NGO の役割です。RCJ は KODOMO ラムサールを通じて ESD を頑張ってきましたが、若い世代のオン・ザ・ジョブ・トレーニングの場として果たしてきた役割は、それ以上かもしれません。こうした経験は大学教育の中ではインターンシップくらいしか組み込みようがありませんが、いつのまにか就職対策科目に変容しています。学生がこうした活動に参加できるように、最近はことあるごとに「授業は敵だ」と話しています。

今年の前期で大学の仕事をすべて終え、私は自由の身になりました。未整理の研究をまとめられるかと思っていいのですが、集中力が低下して仕事になりません。年齢に応じた仕事を、そのときにおかねばならないことを痛感しています。私の仕事はいろんな人に声をかけられて歩んだ「風に吹かれて」人生でしたので、専門性を生かした成果はたいして残せませんでした。仕事人生は楽しめたと思います。

講演終了後の質疑から

Q, 目指しているものがぼやけている中で、どのような解決策のヒントがありますか。

A, 世界の成功や失敗の事例をたくさん勉強することだと思います。もう一つは現場をたくさん、問題意識を持って見ることです。小網代の森や三番瀬など東京から日帰りでゆける湿地も多くあります。湿地関連会議のエクスクーションで得られる経験は、会場の議論よりインパクトが得られます。

Q, 対症療法的な対応が今なくなっているのですね。

A, そうです、例えば水質については、下水も整備されて大抵の地域で環境基準をクリアしています。過疎化高齢化に起因する湿地管理の問題は今深刻ですが、環境の範疇だけでは対応できないのです。

Q, そのあたりは見つけていかななくてはいけないし、若い人たちは入ってきているわけだから、明確にどうしたらいいか。

A, 先の質問と同じ答えになりますが、勉強だと思います。これやりなさいと教えられるのではなく、それこそ世界中の山のような事例の中から、自分で情報を得て、加工して出していく、そのプロセスが大事だと思います。とりわけ後者については、MBA コースのように事例研究をベースとした問題解決シミュレーションを経験しておくことが国際会議で活躍するために必要だと思います。